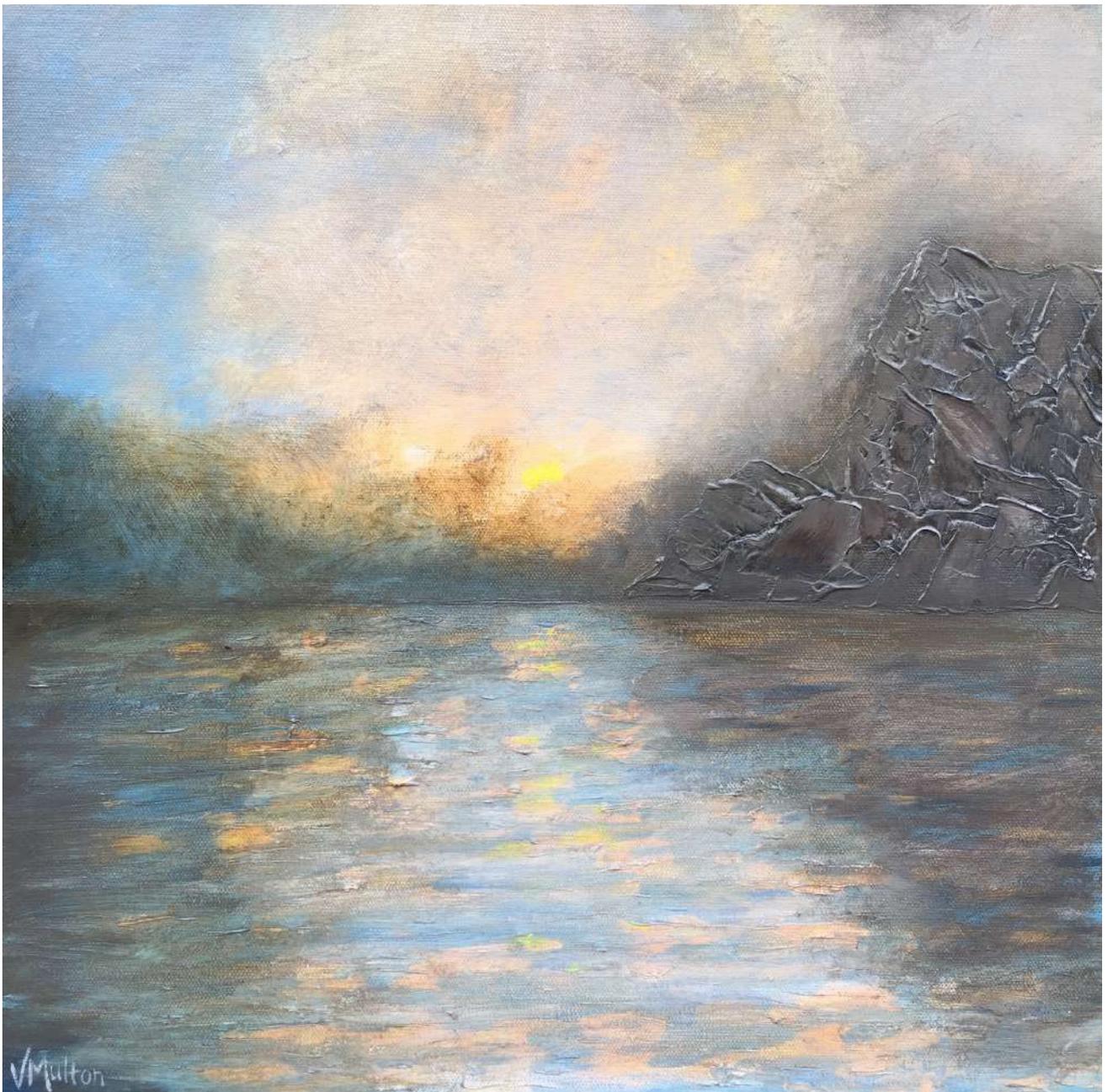

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 269

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5361. 自己究明の道
- 5362. 仮眠中の不思議な知覚体験、芭蕉のような旅に向けて、井筒俊彦先生の全集
- 5363. 今日からのオンラインゼミナールに向けて
- 5364. 自己への帰還と新たな出発～探究的実践への意欲の再燃
- 5365. 今朝方の夢
- 5366. 大死一番の誓願～私の打倒に向けて
- 5367. ここからの変容プロセスに関する走り書き
- 5368. オンラインゼミナールの開始:言葉に先立つ何か
- 5369. 自然法爾と心身脱落
- 5370. 純粹意識が立ち現れる体験
- 5371. 「有るや無しや」の自己を通じて
- 5372. 今朝方の夢
- 5373. 取れてきた感覚:気を伝達する曲作りに向けて
- 5374. 「有りや無しや」の自己:前回のゼミナールの同窓会の動画を拝見して
- 5375. トランスパーソナル的体験を音化して伝達したヨーゼフ・マティアス・ハウアーに範を求めて
- 5376. 泥中を道として生きて
- 5377. ヨーゼフ・マティアス・ハウアーに関する3つの論文と今朝方の夢
- 5378. 本日のゼミナールを振り返って:仮眠中のビジョン
- 5379. 暖冬の日々:今朝方の夢
- 5380. 受託と委託

5361. 自己究明の道

時刻はちょうど正午を迎えた。今日は久しぶりに天気が良い。雲の塊がなく、雲が薄化粧を空にしているだけである。そのおかげもあり、太陽から降り注ぐ光はとても優しい。

振り返ってみると午前中は、とても集中した意識の中で自らの取り組みに従事していた。意識が集中と化し、集中が意識と化した状態であった。そうした中でふと、作曲とは、音の技術なのではなく、心の技術であり、魂の技術なのだ、ということに気づいた。それはシンプルな気づきでありながらも、とても大きな気づきであるように思える。

心ないしは魂の技術としての作曲を通じて、人間として生きることの普遍的な真実に触れながら音を紡ぎ出していく。それができれば、他者や世界と何かしらの共振や共鳴が起こるかもしれない。そのようなことを考えていた。

最近、禅や仏教に関する書籍を少しずつ読み返している。自己究明及び、自己究明を通じた世界究明に向けた意欲が再び高まっている。今回のそれは、禅や仏教の教えを核にしていく。

この4年間の欧州生活において、知らず知らずのうちに様々な体験を積み重ねてきた。だが残念ながら、それらのうちの大部分は省みられていない。内省的にそれらを捉えることが不足していただけでなく、観想的にそれらを捉えることが不足していたのだ。そうした不足を嘆くことなく、今から内省的かつ観想的にそれらを振り返っていこうと思う。これは内側からの要求であり、今この時期にそれを行うことが自分の人生にとっての宿命なのだと思う。そうした宿命に逆らうことをせず、それを促すものに存在を委ねる形でそれを行っていく。

午前中、探究活動の手を一度止めて、少しばかり仮眠を取ることをした。しばらくすると、ビジョンが静かに立ち現れてきた。ビジョンの舞台は北アフリカの入り組んだ街だった。近くに砂漠地帯があるのか、石畳の道には細かな砂がかかっていた。その道は灰色の壁で仕切られており、少しばかりスペースのある場所でサッカーをしている少年少女たちの姿が見えた。私はその光景を眺めている者であった。ビジョンの中には立ち入らず、ビジョンを眺める者としての意識がそこにあったということである。そして、そうしたビジョンを眺めている自分を眺めている自分がありありと存在していたことを覚えている。

いついかなる季節のいかなる曜日においても落ち着きを持つフローニンゲン。その落ち着きと静けさは、自己を深く寛がせてくれる。こうした寛ぎの中で、粛々と自己究明を続けていこう。自己に関して少しずつ何かが見えてきている一方で、見えないことが増加しているようにも思える。その双方を抱えながら歩き続けていくことが、自己究明の道を歩くことであり、その道に成るということなのだろう。フローニンゲン:2019/12/19(木)12:15

5362. 仮眠中の不思議な知覚体験、芭蕉のような旅に向けて、井筒俊彦先生の全集

時刻は午後7時を迎えた。大抵、夕食を摂った後に1日の振り返りの日記を書くことが多く、今日もそのような1日のようだ。今日は本当に天気恵まれ、久しぶりに1日中晴れた。午後には、池のある近所の公園に行き、公園を外回りで軽く走った。池に浮かぶカモメやカモたちも気持ち良さそうであり、彼らの様子を眺めていると、こちらも嬉しくなった。ぼんやりと池を眺め、自己が池に溶解していく感覚をしばし味わっていた。

そういえば、今日の午後に仮眠を取っていると、不思議な知覚体験をした。仮眠から目覚める数分前に、ビジョンの中に蛇口が現れ、それに触れた私は、蛇口から出てくる水の振動を全身で感じ、身体が震える水のエネルギーで満たされていったのである。

その光景をもう少し詳しく述べると、蛇口に触れた瞬間に電流が身体に流れるような感覚があり、私はスローモーションでゆっくりと後ろに倒れていった。そして、地面に仰向けに倒れた時に、全身が振動する水のエネルギーを感じていたのである。そして、体から意識が抜け出していこうとしていた。身体から抜け出そうとしていた私の意識は、まずはエネルギー体となり、それが水の振動と共振を強めていき、ゆっくりと天井の方に昇っていった。

そして突然ビジョンが消え、全くの無の空間の中にポツリと自分の意識だけが浮かんでいた。そこは全くもって無の空間だったが、逆に全てが私の意識で満たされていたという点においては、全くもって有の空間だった。「なんだこの空間は？」という思考が芽生える余地はまだ残されており、私の意識はしばらくその空間の中にいた。しばらくしてから無の空間が消え、仮眠を取っていたベッドの上に意識が戻ってきた。そのような体験をしていた。

夕方にふと、いつか芭蕉が行ったように、日本全国を旅しながら曲を作っていきたいという思いが芽生えた。これは以前から持っている考えであり、ぜひともいつか実現させたい。日本には数多くの名所があり、そこを時間をかけてゆっくりと巡りたい。その旅の過程の中で、その場所でしか出会えないものに出会い、そこでしか感じられないものを感じ、それを音の形にしていく。そうした旅行記的な作曲実践をしながら日本全国を巡る旅をいつか行いたい。それを実現させる日は必ずやってくるだろう。

ここ最近では、禅や仏教思想を参照することを通じて、過去の自分の体験、現時点までの探求の歩み、そして現在の自分の有り様について内省することを行っている。そこでふと、そういえばここしばらくは、井筒俊彦先生の書籍を読んでいなかったと思い、久しぶりに全集を紐解いてみた。すると、一連の全集を再度最初から最後まで読むのは今だと思った。

今オランダの自宅の書齋には、井筒俊彦先生の全集1巻から12巻のうち、1巻から11巻までである。最終巻については、ちょうど私がオランダにやってきてから発売されたものであり、まだ入手はしていない。それでも、1巻から11巻までとなると、相当な分量があり、読み応えがある。時期としては、新年にミラノから戻ってきたら、井筒先生の全集を改めて最初から最後まで読み進めていこうと思う。とりわけ第5巻に気になる箇所がいくつかあったので、まずはそれらを読み、そこから第1巻に戻ってきて、手持ちの第11巻まで読み進めていく。この時期に再び井筒先生に戻ってきたというのは何か意味があるのだろうか。フローニンゲン:2019/12/19(木) 19:23

5363. 今日からのオンラインゼミナールに向けて

時刻は午前3時を迎えた。今朝は午前2時半に起床した。いつものように目覚めはすこぶる良く、目が覚めた瞬間から1日の活動に向けて準備万端のように思われた。心の落ち着きがありながらも、身体はもう活動に向けてエネルギーが充満しているような感じである。

本日から、いよいよ全4回にわたるオンラインゼミナールが始まる。初回のクラスは今日からなのだが、受講者の方々からは事前に質問を寄せていただいております、すでに26個の音声ファイルを作成し、時間としては400分近いものになっている。前回のゼミナールはどちらかというと「理論編」であり、今回は「実践編」であることからか、いただく質問も実践的なものが多く、回答させていただくこ

らとしても得るものが多い。ゼミナール開始前の段階ですでにかなりの量の音声ファイルを作成しており、ここから実際のクラスが始まり、これからの2ヶ月弱の間において、またかなりの音声ファイルを作ることになるかと思う。音声ファイルの作成は、日記を綴ることや作曲実践と同様に、創造に伴う喜びや楽しさのようなものがあり、一度作り出すとついつい多くを作ってしまう。それはどちらかというところ肯定的なことなのだが、創造活動に伴う中毒的な側面を改めて感じる。

今日の初回のクラスでは、冒頭でもう一度ゼミナールの趣旨や留意事項を確認しておこうと思う。そこからは、最大3人ぐらいで1つのグループを作り、簡単な自己紹介を行っていただいた後に、事前課題についてのグループディスカッションを行ってもらおうと考えている。

前回のゼミナール同様に、今回のゼミナールも1回あたりのクラスの時間が90分である。前回のゼミナールに参加してくださっていた何人かの方から、グループディスカッションの時間がいつもあつという間であり、盛り上がり始めたら終わってしまうこともあった、というフィードバックをいただいていた。そうしたことも考えて、今回は少なくとも30分は時間を確保していきたいと思う。40分だとおそらく逆に長いように思えるため、最大で35分から37分ぐらいにしようかと思う。

書きそびれていたが、グループディスカッションの前には、今回取り上げる『インテグラル理論』の書籍に関する質疑応答を行う時間を設ける。ただし、今回は実践編であり、書籍については前回のゼミナールで1章1章取り上げてきたため、グループディスカッションとその後の全体での意見交換に時間を多く取ることを考えている。書籍に関する細かな質問については、受講者専用のGoogleドライブ上の質問Boxの方を通じて行っていただくように促そう。

今週と来週にゼミナールのクラスがあり、年末年始を挟んで、1月にまた2回ほどクラスがある。2019年の締め括りと2020年のスタートを、今回のゼミナールを通じて行う。早いもので、気がつけばあと10日ほどでマルタ共和国に向けて出発する。出発は大晦日の日である。フローニンゲンの若者たちは少し気が早く、ここ最近は何日にも爆竹を鳴らす音が時折聞こえてくる。近くで爆竹を鳴らされると心臓に悪いのだが、それもこの季節においては仕方ない。ここから年末に向けて爆竹が鳴らされることが多くなるだろう。年越しはできるだけ静かに祝いたいので、爆竹から逃げるようにマルタ共和国へ行く。その日が近づいていることを静かに実感する。フローニンゲン:2019/12/20(金)03:34

一耳に見て、目に聞くならば、疑はじ。自ずからなる軒の玉水——大灯禪師

戻ってきた感じがする。再び還ってきたのだが、以前とはまた違う自己としてそこに戻ってきた感じがする。それがここ最近の感覚である。

昨日あたりの日記に書き留めていたように、再び禅や仏教に強い関心を示し、それをお勉強ではなく、それらを実践的に生きることを行い始めようと思っている自分がある。思い返してみると、早朝に行っているヨガの実践について、数ヶ月前に見直しを行ったことが思い出された。それがいつだったかは具体的に覚えていないが、ある朝ふと、起床直後に行っているヨガのアーサナの種類を見直し、これまでよりも少し長めにヨガを行い始めた。そしてその後しばらくして、14日間に及ぶ断食があった。それを経てからの禅や仏教の実践的探究の再燃である。

何か私には、ヨガの実践の見直しと断食が、禅や仏教の実践的探究の再開に向けた準備であったように思えたのである。それらは必然的な準備であり、本格的に再度禅や仏教の実践を通して自己を知り、世界を知ろうという試みに向かう自分の姿を見る。

自己にベクトルが向う今回の探究衝動は、アメリカに渡る前に芽生え、そこから4年間続いていたものに似ている。それをもって私は、「還ってきた」という表現をした。もちろん、今回還ってきた当人は新たな自己であり、今回の探究的実践を行う姿勢や成果は必然的に異なるだろう。一巡してまた同じようなスタートラインに立ったかに見えるが、それはまるっきり異なるスタートラインであり、そこから歩み始める景色もまた必然的に異なるだろう。

今回の探究的実践は、過去のそれよりも長い期間を要するよう思われる。それこそここから一生涯続くかもしれない。そうであったとしてもそれを始めようという気概のようなものがある。成果というものを期待しては空転してしまいそうだが、ぼんやりとではあるが、今回の試みを通じて、生きているありのままをそのままに見ることのできる眼、すなわち「仏眼」を獲得し、それを通じて日々の生活を営めるようになるような気がしている。また、そうした眼だけではなく、生きているありのままの姿から発せられる音を聴き取れる耳、「仏耳」も獲得されるのではないかという小さな期待がある。そ

して、それらの眼と耳は統合的な感覚として働き始め、両者の間にはなんの分別もなく、この世界を耳で見て、目に聞くという恒常的なあり方が実現されるだろう。

今回の探究的実践においては、確かに禅や仏教に関する手持ちの文献を改めて読み返していくが、そうしたお勉強はほどほどにして、何よりも日常の中で禅的に生きることを大切にしたい。

仏道の悟りに至る修行の過程の中に、「正見」というものがある。これは、自分の目で見、自分の肌で感じたことのみをデータとして、それをよく観察することを意味する。これは本当に大切なことであり、それを行っているようで、徹底的に行っている人は少ない。今回の試みでは、それを徹底的に行う。確かにこれまでもそうしたことを心掛けてきたが、それをより徹底させていく。探究過程で見たこと、聞いたこと、感じたことを、言葉の形にし、音の形にしていく。体験そのものへの観察と、形になったものからの再観察を行っていく。

2019年の最後の最後になって、このような取り組みへの意欲が高まるとは思ってもいなかったことである。2019年の最後に起こったこと、それは自己への帰還であり、新たな出発であった。フローニンゲン:2019/12/20(金)03:58

5365. 今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。今、八丁味噌で作った具なしの味噌汁をゆっくりと味わっている。

外の世界は深い闇に包まれていて、静寂さが滲み出している。オランダにやってきた1年目とはもう随分と異なる印象で闇や静けさを感じている自分がいる。それもそのはずであり、外側に広がる闇も静けさも、もはや自分に他ならないと気付いているのだから。そしてそれらは、即自己でありながら、自己をさらに深めていくものでもあると気付いているのだから。

一杯の味噌汁を一口ずつ飲んでいくとき、その一口は自己になる。一口の味噌汁が自己の身体を形作るとは言わずもがなであるが、ここで言わんとしていることはそうしたことも含まれながらも、それ以上のことである。目の前の味噌汁は、もう最初から自己であったという気づき。その気づきがある。仏道を通じた探究的実践を再度始めようと思いついてから、小さな変化が自分の内側の中で起き始めていることに気づく。それらの変化を言葉として書き留め、音として形にしていこう。それは、

そうした変化そのものに囚われないためでもあり、同時にそれらの変化をさらに育てていくためでもある。

それでは、今朝方の夢を走り書きしたメモを見ながら、今朝方の夢について振り返り、その後、作曲実践を始めたい。夢の中で私は、地元の国道を歩いていた。その国道は、戦争時代に戦闘機の滑走路として使われていたため、今でも道幅が広い。

国道の脇にある歩道をしばらく歩いていると、向こうから小中学校時代の友人(RS)がやってきた。彼は運動神経が抜群であり、どのようなスポーツをやらせても突出していた。そんな彼ともう1人、ちょうど目の前にある小高い丘の上に住んでいる友人(YU)も姿を表した。私たち3人はそこで少し言葉を交わし、その場でサッカーをしようということになった。運動神経の良い友人が、今からロングキックをするとのことであり、もう1人の友人と私はそれを見守ることにした。

友人が助走を始め、思いっきりキックをすると、それは見事に遠くの方まで飛んでいった。だが、思っていたコースから少し外れてしまったようであり、ボールは近くの森の背の高い木の枝に挟まってしまった。ボールを蹴った友人は、すぐにその木に向かって走っていき、なんとかボールを取ろうと始めた。すると、木の上の方にカラスがいて、ボールはそのカラスにぶつかっていたようだった。カラスの表情を見ると、ボールがぶつかった衝撃で失神しているようだった。

友人は、カラスの口元にあったボールを取ろうとした。するとその瞬間に、カラスの目がカッと開き、カラスは友人をクチバシで襲った。そこで友人は、そのカラスを殺してしまおうと考え、足元に落ちていたクワでカラスを打ち殺そうと始めた。クワを打ち付けられたカラスは悲痛な雄叫びを上げていたが、何度クワで打ち付けられても一向に死ぬ気配はなく、その生命力は凄まじいものがあった。はたから見ていた私にとって、それはかなり残酷な仕打ちのように思えた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、小中高と付き合いの長い友人(HY)と一緒に下校をしていた。ちょうど高校の授業が終わり、自転車を漕ぎながら部活の話をしていた。すでに私は高校三年生になっていたが、サッカー部に入ろうかと考えており、彼にその件について話をもちかけた。希望しているポジ

ションとしてはボランチであり、そのポジションに空きがあるかを聞いた。より厳密には、今は誰がレギュラーを務めているかを尋ねたのである。

最初友人は、左右のボランチのうち、どちらをやりたいのかを私に尋ねてきたが、どちらでも問題なかったなので、それを伝えた。すると、どちらのポジションも、私たちの学年ではなく、一つ下や二つ下の後輩が務めているそうだった。同学年に何人かそのポジションにふさわしい友人がいることを知っていたのだが、彼らよりも上手い選手が下の学年にいることを私は驚いた。

「今から入部してもレギュラーになれないかもしれないな」そんな考えが脳裏をよぎった。そこで私は、他のポジションについても彼に話を聞いた。すると驚いたことに、他のポジションも同様に、多くは下の学年が務めているようだった。同じ学年の友人たちは一体どうしてしまったのだろうと思い、今度実際に試合を見に行き、下の学年たちがどれだけ上手いのかを確認しようと思った。

私たちはそこから引き続きサッカーの話をしていった。しばらくして、友人の自宅の前に到着した。友人が「少し寄ってく？」と声を掛けてくれたので、ちょっとお邪魔させてもらうことにした。家に上がり、友人がリビングの方に向かって行ったので後をついて行ったところ、真っ暗闇に包まれたキッチンから、友人の母親が姿を表した。私は少しびっくりしてしまった。どうやら友人の母親は、電気をつけることをせずに料理を作っていたらしい。

友人の母親に挨拶をしたところで夢から覚めた。今朝方の夢の中で印象に残っているのは、やはりカラスのシンボルだ。それが何を意味するのかについて、まずはドリームディクショナリーを使って調べてみよう。それと並行して、自分なりの解釈と意味づけを施してみようと思う。

「カラスが失神した」という表現をした時、「失神」という言葉に改めて関心を持った。失神とは、神を失うことなのだと気付いたのである。意識の中には神的なものがやはり宿っているのである。あるいは、意識そのものが神的だと言えるかもしれない。または、意識の働きそのものが神的であるということもできるかもしれない。いずれにせよ、仏道においては、それは仏性と呼ばれるものに該当するだろう。私たちの意識に宿っている神的・仏的な働き、ないしは生命力への関心が静かに高まっていく。フローニンゲン:2019/12/20(金)04:44

時刻は午前8時半を過ぎた。先ほど乾燥機のスイッチを入れた時に外を眺めると、そこには鮮やかな朝焼けが広がっていた。それは本当に息を飲むような美しさであった。自転車で通りを走る人たちも、皆顔を上げて朝焼けに見入っているようであった。

赤紫色の光の帯がまだ空に残っている。こうした美を拝めることの幸せ。それに気づける心の余裕とそれを味わえる心の余裕。それは今後も持ち続けていきたいものであり、ここからはさらにそうした余裕を育んでいく。

「これだ」と思った。昨日の日記でも書き留め、確か今朝方の日記でも言及していたように思うが、ここから私は仏道を通じた探究的实践を行っていく。先ほど、我が我に対して宣言をしていた。厳密にはそれは、自己が我に対して宣言をしていたと言っていいかもしれない。その宣言は、「我を打倒する道をこれから歩む」というものだった。もはやいくらカネがあっても時間があっても、我が立ち続ける限り幸福などありようがないという場所までやってきた。仮に幸福が感じられたとしても、それはほんのごくわずかな時間しか続かない仮初めの幸福感である。

「全てよし」「これでよし」という絶対的な安心感かつ諦念感の中で幸福感を感じるためには、我を撃ち倒さなければならないのだ。我を打ち倒し、無我への転換を図る大悟徹底こそが、今の自分に求められていることなのだ。いくらカネや時間があっても本当にダメだ。ダメ以上にダメだ。この我が立ち現れ続ける限り、絶対的諦念感及び安心感の中で、究極的な幸福感を永続的に感じ続けることなど不可能なのだ。

仏道を通じた探究的实践に入ろうと決意したのはそのためだ。今から打ち倒そうとする我がこうしたことを語れるのだろうか。今おそらく、私は我から少しばかり離れたところから、だがそれでもまだ我として我を倒そうと宣言しているように思える。このあたりが大変興味深く、我は撃ち倒されることを恐れていながらも、同時にそれを望んでいる節もあるのではないかと思わされる。人間存在というのは、かくも矛盾した事柄を内包しているようなのだ。その滑稽さには思わず笑ってしまうが、今はそうしたことを笑っている場合ではない。

我を打ち倒すための理性的探究と存在実践をこれから徹底させていく。おそらくこれが最終関門であり、この関門を潜り抜けるまでにもしかしたら一生かかるかもしれない。いや下手をすれば、一生かかってもこの関門を潜り抜けられないかもしれない。どちらであったとしても、もうその関門を潜り抜ける道を歩まざるをえないところまでやってきた。そうした状況に置かれてしまったのである。

今日からは我が現れる都度、一喝する。そして、一喝した私の残滓に対してもまたすかさず一喝する。日々、最大限の慈悲心を持って我を殺しにかかる。大死一番としての誓願を立てた。この誓願に基づいて、あとはもう突き進むのみだ。フローニンゲン:2019/12/20(金)08:59

5367. ここからの変容プロセスに関する走り書き

いまだ彫琢されぬ貧困な体験的語彙でこれまでの歩みと現在の課題について書き留めておく。これは走り書き、ないしは殴り書きの類のものである。

最初、「我」を徹底的に客体化するプロセスがあった——当然ながら、その前には客体化される対象としての我を確立する必要があった——。その後、その我がフッと消える瞬間があった。

我に対して究極的に客体化を進めていくと、我が忽然として消える瞬間があり、それはもう大爆笑が起きるような出来事だった。これまであれだけ懸命に我を打ち立て、そして打ち立てられた我をこれまであれだけ懸命に客体化してきたのに、それが非在ないしは不在だと知って大笑いが起きる体験が何度かあった。実際には、それは日常ふとした時によく起こっていた。

我を確立し、我を対象化し、そして我など存在しないと気付いたというのが上記のまとめになる。そして、我など存在しないと思っている期間が続くと、今度は我は明確に存在していると気づき、同時に自分の中に我ではない神性ないしは仏性のようなものが内在していることに気づいた。ここからは、我と仏性の混在の時期である。

時に我が前面に立ち、時に仏性が前面に立つ。そのような振り子運動のようなものが起きていた。おそらく、今の私はこのプロセスの中にいるようだ。ここから求められること。それはもうただ一つだけだ。仏性を通じて我を放伐すること。それにより、我を溶解させ、我を虚空の彼方に解放することである。そうすれば、自己は究極的に仏性になる。そしておそらく少しばかり先が見えているのは、今

度はこの仏性を解放していく必要があるだろうということだ。つまり、我の打倒を通じた仏性の確かな確立を経て、その仏性すらも手放す段階があるだろうということだ。もうそれは明白だ。それは間違いなく必要であり、それなくしては、幸福を超えた幸福などあり得ない。そしておそらく、仏性の解放すらもまだ最終的なプロセスではない。

もう一度、大爆笑が起こるはずだ。そう踏んでいる。最大級の抱腹絶倒は、仏性を解放した後にやってくるだろう。そこでは、自己が全てとなり、全てが自己となり、自己は存在しているようで存在しておらず、存在していないようでいて存在するようになるだろう。簡単に言えば、「存在」即「非在」即「偏在」のような状態になるのではないかということだ。

いつか一連のプロセスを飛ばして、そうした状態を経験したことがある。それが存在の中に残り香として香っている。だからうっすらとわかるような気がする。そこが次の、そして最後の大爆笑地点なのではないかと思う。そこではおそらく、自己は大爆笑となり、大爆笑は自己となり、自己も大爆笑も消え、そして両者はともにいかなる森羅万象の中に偏在するようになる。そのようなプロセスが自分の前に現れ始めているのに気づく。フローニンゲン:2019/12/20(金)09:24

5368. オンラインゼミナールの開始:言葉に先立つ何か

時刻は午後の7時を迎えた。今日からいよいよ『インテグラル理論』の実践編のゼミナールが開講となった。前回のゼミナールよりも少人数の募集をしたため、本日金曜日クラスに参加して下さったのは10数名ほどであった。人数に関しては前回と異なるが、グループディスカッションからの全体の場でのディスカッションは前回と同様に、私にとっても大変有意義な場であった。

受講者の方々からは、クラスの間だけではなく、質問Boxを通じての質問によって、様々な領域の言葉を学ばせてもらっている。単純に日本語の単語を新しく学ぶことも多々ある。新たな言葉を学ぶことは、どこか新たな和音を学ぶことに似ている。言葉も和音も、ある特定のコンテキストにおいてその意味が立ち現れる点では共通である。

ゼミナールの場を通じて、自分の言語世界がまた豊かになっているのを実感する。それに伴い、自己そのものが豊かになっていく。さらには、それは言語世界だけではなく、自分の内側の音楽世界にも多様な影響を与えている。それらの影響についてはまたどこかの機会書き留めておこう。

ゼミナールを終えて少し仮眠を取り、今回のゼミナールから行い始めた試みとして、私自身もクラスの振り返りがてら、その日のクラスに関する補足事項などを音声ファイルで録音することにした。気がつけば、1人で35分ほど話をしていた。それはクラスの内容を補足する意味もありながらも、自分にとっての振り返りとして行っていたためにそうした長さになってしまったのかもしれない。

音声ファイルを作成した後は、気分転換にジョギングに出かけた。今日は早朝に、鮮やかな朝焼けを拝むことができた。幸いにも、夕方にも夕焼けを拝むことができた。ジョギングから自宅に戻ってくると、先日ドイツの書店に注文していた“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”が届いていた。本書は、12音技法をアーノルド・ショーンバーグよりも早く考案したとされるヨーゼフ・マティアス・ハウアー（オーストリアの作曲家:1883-1959）の作曲思想と作曲技術について解説している。

ハウアーは、シュタイナーを含め、様々な思想家の神秘主義的な思想を探究し、その探究の成果を作曲に活用していた大変興味深い人物である。本書は年明けから読もうと思っていたのであるが、年末年始に読もうと思っていた書籍群を次々に読み終えてしまったので、明日から本書に取り掛かろうと思う。そうすると、年明け以降に新たに読む本がなくなってしまうそうだが、それはそれでいい。良書はとにかく繰り返し読むことが大切なのだから。

もう一つ本日の気づきを書き留めておきたい。本日のゼミナールを通じて、不思議なことに気づいた。それは、「言葉は発せられるよりも前に存在している」という事実である。これは一体なんなのだろう。意識に先行して言葉がもう存在していることを知覚している自分がいた。言葉はもうそれが発せられる前に無意識の領域に存在していて、意識はまるでそれを運ぶ水路のような役割を果たしているだけのように思えたのである。

なるほど、断食や生活習慣の見直しなどを通じて行ってきたことは、水路の清掃ないしは浄化の類であり、その結果として、言葉が無意識という泉から止めどなく汲み出されるようになっているのかもしれない。もう少し付け足せば、おそらくそうした実践によって、無意識そのものもより明瞭なものとなり、言葉が誕生しやすくなっている印象がある。そして何より、言葉は発せられるよりも前にすでに存在しているというような気づきが芽生えるようになったのも、意識下のそうした清掃実践ないしは浄化実践のおかげかと思われる。そして言うまでもなく、言葉は発せられるよりも前に存在している

という現象と全く同じことが音に対しても起こっている。どちらも等しく興味深い。フローニンゲン：
2019/12/20(金)19:33

5369. 自然法爾と心身脱落

風が吹いている。幾分強い風が世界を通り抜けた。自分はそこに風としてあり、風として去った。

いやはや気が早い人たちもいるものだ。ここ最近、毎日近所で1日1回は爆竹の音が鳴る。今日は夕食時に一度鳴った。時々、その後に救急車のサイレンが鳴ることがあり、爆竹を打ち上げて腕を吹き飛ばしてしまう人が毎年何人もいるらしいので、そのあたりは気をつけてもらいたいものだ。自分の体を大切にしてほしい。

ところで、吹き飛んだ後のその腕は、当人にとって自分と認識されるのか、それとも、もはや酸素や炭素の塊としての物体とみなされてしまうのだろうか。身体の大部分は酸素と炭素でできているが、優しさでもできているように思うのは私だけだろうか。爆竹の音はあっていいが、悲鳴の音はやめてほしい。

「自然法爾(じねんほうに)」という親鸞聖人が残した言葉。その意味を体感として実感する日々が続く。自然法爾、それは人間の思慮分別を超えたあるがままの自然の力が自ずから働くことを意味する。それは自分自身、そして自分自身を取り巻く世界に対して働きかけている。それを実感する日々が続く。

とりわけこの半年間、ないしは今年1年間、あるいはもっと前かもしれないが、あるがままの巨大な力が自己の内側から湧き上がっているのを感じる。それは自分の内側から湧いているのか、はたまた外からもたらされているものなのかよくわからない。それはわからないのだが、確かなことは何か無限大に太いものにつながっているというありありとした触感である。今、この瞬間もそれを感じている。

なるほど、我執が消し飛んだ心身というのは、宇宙大の心身であり、この世の神羅万象と呼応し、一体化する心身なのだ。それが心身脱落というものなのであり、私はそれを体験しているのかもしれない。それは一時的な状態的として強く感じており、そして恒常的なものとして緩やかに感じている。このあたりについても、やはり仏教のテキストを紐解いてみよう。

先ほどの日記で書き留めたように、明日からは、作曲家のヨーゼフ・マティアス・ハウアーに関する“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”を読み進めていくが、今から随分と昔に購入した、井筒俊彦先生の“Toward a Philosophy of Zen Buddhism (2001)”を再読しよう。

ここ最近注文した音楽関係の一連の書籍、そして詩と神秘主義に関するコリン・ウィルソンの書籍はもう読んでしまった。年末年始にマルタ共和国とミランに持って行く書籍は、井筒先生の上記の書籍にしようか。その選択をさせるのも、自然法爾の力によるだろうか。自然法爾の力の恩恵を授かりながら、大悟徹底に向けた歩みをゆっくりと歩んでいこう。着実に、そしてゆっくりと。ゆっくりと、そして着実に。フローニンゲン:2019/12/20(金)19:55

5370. 純粹意識が立ち現れる体験

時刻は午前4時を迎えた。今朝も昨日と全く同じ時間に起きた。文字通り、1分変わらず同時刻であり、起床したのは午前3:23であった。物理的な時計など使わなくとも、体内に時計が備わっており、それが時を教えてくれる。自分の内側の時を通じて生きる日々が常態化している。

昨夜就寝前に、久しぶりの体験をした。それは不思議と言えば不思議なのだが、禅仏教の観点から言えばそれほど不思議ではない体験だった。それはどのような体験だったかと言うと、我の外に我が立ち、元々の我をどこか別存在として眺めている状態だった。それが起こったのは、ちょうど就寝前の歯磨きを終えたときだった。鏡に映った自分を見たとき、何か自分の存在に憑依していたものがスッと抜けていき、そこにあったのは純粹意識とでも言えるようなものだった。

スッと抜けていったもの。それが囚われとしての我であった。憑依していた我が抜けていき、純粹意識となった私は、そこでまた不思議な気づきを得た。「何か自分が通じて生きている」そのような気づきが降ってきた。より厳密に言えば、そうした自分さえをも生じさせている何か自分が通じて存在しており、純粹意識さえをも生じさせる何か自分が通じて存在している感覚があったのである。

「なるほど、自分とはそうした力の通り道に過ぎず、器に過ぎないのだ」そのような気づきが次に生じた。自己が何かの働きの通り道または器として存在しているというありありとした感覚がそこにあった。そこから私は、その力の働きに委ねられる形で、いくつか連続する形で別の気づきを得てい

た。一つには、自分に与えられた名前、ないし本名というのは本当の名前ではなく、名前もない自己の存在が確かに存在しており、それが今この瞬間にいるというものだった。厳密には、それは昨日の日記でも書き留めていたように、「存在」即「非在」の類の自己であるから、名前のない自己はいるようでおらず、いないようで常にいるということに気づかされたのである。

自分の本名の背後にいる純粋な自己。あるいは、それは自己を自己たらしめている「力」ないしは「働き」と言えるかもしれない。それぞれのものは形を持たないのだが、自己を自己たらしめることによって形を生み出すものである。なるほど、ひよつとすると、形を生み出す創造力というのはこの力あるいは働きのことを言うのかもしれない。創造の源泉はこれなのではないだろうか。そのようなことを今思う。

洗面所の鏡の前で私はしばらくの間、鏡に映った自分のようでありながら自分ではない存在、そして自分のようではない自分という存在に対して微笑みかけていた。微笑みかけられたのは我では無く、純粋自己だった。そこで私はふと、米国で生活を始めた最初の年に起こった例の体験は、この体験と同種のものなのではないかと思ったのである。あの時の自分の身に突如として降りかかったのは、我から超出していく体験だったのだ。

純粋意識としての自己に憑依していた我がスッと抜けていき、そこに残ったのは純粋意識だけだった。だからあの時の私は、頭の中が真っ白になり、全てのものが自分を通して現れているという存在感覚を得たのだと思う。あの体験をしたのは、もう8年も前になる。8年前のあの体験の本当の意味が少しずつ見えてきている。一つの体験の意味を紐解くのにそれだけの時間がかかるらしい。体験の意味が深ければ深いほど、その体験の意味を紐解くには時間が必要なのだろう。

昨夜の体験、及び8年前のあの体験に内包されている意味を、これから少しずつ紐解いていこう。それは起こるべくして起こったのだと思うし、その意味を紐解いていくことによって、純粋意識は我からの囚われから解放されていくだろう。フローニンゲン:2019/12/21(土)04:19

5371. 「有るや無しや」の自己を通じて

今日は土曜日らしい。そして、明日は日曜日らしい。一応、今日は土曜日であり、明日は日曜日であることを認めながら、今日と明日を生きる。本当のことを言えば、今日は土曜日ではなく、明日は

日曜日でもないと思うのだが、世界がそのように定めているので一応それをある程度認めることも必要かと思う。

時間というものが外側にあるのではなく、また内側にあるのでもなく、自分を通ったものが時間になる感覚。自己は時間を通る通路であり器であるという感覚。通路に流れた時間が自分の時間として知覚され、器に堆積していった時間が時間の積み重ねとなるように感じられるこの感覚。

時刻は午前4時半を迎えた。日が昇るまでにあと4時間ほどある。あと10日したら、私はマルタ共和国へ行く。マルタに数日間滞在し、そこからミラノに滞在をする。それらの場所を滞在している時、どのような時間が自己を通過していくのだろうか。

今外に広がる世界は、そつと何かを自分に語りかけている。とても静寂な世界。

昨夜は、いくつか興味深い気づきを得ていた。まだ日記に書き留められていないことがある。走り書きされたメモを今改めて眺めると、そこにはこのようなことが書かれていた。『有無を言わず』…。有るでもなし、無しでもない。ああ、そういうことか。有るままに無く、無いままに有る。有るままに無い自己。無いままにある自己。それは、とてもとてもシンプルな真実」そのようなメモが残されていた。

また続きのメモを見ると、『元々』…。そう、元々！元々、ここに絶えず有るや無しやの自分。そうそれは、元々そうだったのだ。どうやら自分は元々に帰ってきたようなのだ。元々の自分が今ここにいる。元々の自分は、常に元々の自分として、いついかなる時も元々ここに有るや無しやの状態に絶えず「有るや無しやしていた」のである」

それらの一連のメモを改めて眺めると、それらは大変興味深い気づきのように思えてくる。自己は有無を言わず、そして有無を言わせない存在のようだ。それが一番しっくりくる定義あるいは存在認定の仕方のように思える。

自己は有無を言わないし、有無を言わせない。本当にそうだ。純粹意識としての自己はまさにそうした特性として存在しており、これまで純粹意識としての通路ないしは器として生きてくる中で、自分の人生を大きく変えてくれた決断や行動の類はどれもみな、有無を言わせないものだった。

アメリカに渡った時やオランダに渡った時もそうだった。発達理論を学び始めた時や作曲実践を始めた時もそうだった。それら全てにおいて、私は一度も有無を言ったことなどなかった。その背後には、純粹意識からの働きかけがあり、それに素直に応じた自分がいたのだろう。逆に言えば、有無を言うような決断や行動の類は純粹意識から生まれたものではなく、良からぬ方向に私たちを向かわせるのではないかと思う。そこには、想像もしないところに私たちを運んでくれる純粹意識による導きが欠如しているのだ。

これからも、純粹意識の導きに基づいて生きていこう。それが自己を通過する過程で生じた有無を言わさないアクションを継続させていこう。それが真の実践道のはずだ。その道を再度また新たな足取りで歩こうとする自分は、「元々」の自分に帰ってきた。元々の自分が今ありありと認識される。それそのものは有るや無しやの自分であるため、それをありありと認識するというのはおかしいかもしれないが、とにかく自己が何かを通して立ち現れ続けているという確かな感覚がある。フローニンゲン:2019/12/21(土)04:49

5372. 今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。これからいつものように少しばかり今朝方の夢について振り返り、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日は作曲実践に打ち込むだけではなく、昨日届いた“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”を読み進めていきたい。

昨夜就寝前に少しばかり全体の中身を確認したところ、我ながら非常に良い買い物をしたと思った。2019年に購入した書籍全体を振り返ってみると、今後も繰り返し読みたいと思うような書籍と20冊ぐらい出会うことができ、読書においても非常に実りのある一年だったように思う。中でも、昨日ドイツの書店から届いた上記の書籍は、自分にとって大変意義のあるものになるだろう。今日から、本書の主題であるヨーゼフ・マティアス・ハウアーの思想と作曲技術を少しずつ汲み取っていき、それらを養分にしながら作曲実践を行なっていく。

それでは、今朝方の夢について振り返っていこう。夢の中で私は、小中高時代の友人(HY)とサッカーの話をしていて。場所は見慣れない山小屋の前であった。季節は冬のようなのだが、それほど寒く

なく、時間帯は午後だった。その日はとても天気が良くて、午後の太陽の光は柔らかかった。私たちは柔らかい太陽の光に包まれながら、思い思いにサッカー談義に耽っていた。

しばらくすると、部活の時間となったようであり、彼は近くのグラウンドに向かおうとした。しかし私はその山小屋のような宿泊施設に残り、そこで筋力トレーニングをすることを彼に伝えた。すると彼は、「確かにグラウンドは雪で覆われているだろうから、室内で筋トレをした方が良さそうだね」と述べた。私はうなずき、独り先に宿泊施設の中に入っていった。施設の中は日本の旅館のような作りをしていた。

私は一旦自分の部屋に戻り、着替えをしようと思った。自分の部屋に到着すると、部屋の窓が換気のためか開いており、誰かによって布団が干されていた。太陽の光を浴びる布団の上をそよ風が小走りで走り抜けていた。部屋に差し込む太陽の陽光は輝いており、私は誰が布団を干してくれたのかと考えていた。するとそこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は体育館の中にいた。そこは立派な体育館であり、その所有者はどこかの街であった。体育館の中は真っ暗だったが、そこにたくさんの方がいることがわかった。その場にいた人たちは、綺麗に整列をしており、突然流れ始めた音楽に合わせて、彼らはダンスを始めた。そのダンスは特に統一感はなく、みんな好きなように踊っていた。

なぜだか私はバスケットボールを手に抱えていて、そのボールを誰かに奪われないように注意していた。すると、私の背後からそのボールを奪おうとする人がいて、振り返ってみると、中学時代のバスケ部の友人(KM)だった。彼は遊びの一環として私からボールを奪おうとしているようであり、私もそれを遊びと認識した上でボールを取られないようにした。しばらくそのような遊びを彼としていると、辺りは一瞬にして光に包まれ、その場から自分以外の人たちが消えた。

体育館に1人残された私は、歌の練習でもしようかと思った。今度学校の出し物で合唱があり、それに向けて歌の練習をしたかったのである。自分の歌声を人に聞かれるのは少しばかり気が引けたため、このように1人で体育館を使えるというのは有り難かった。いざ練習を始め、少し経ったところで、体育館の入り口の前を通る人の姿が見えた。私はそこでパタリと歌うことをやめた。

見ると、体育館の入り口の前を通過したのは、部活の後輩であり、同時に同級生の女性友達(YY)の弟だった。彼に自分の歌声を聞かれてしまったかもしれないと思った私は、逃げるようにしてその場を去ろうとした。彼の姿が見えた扉とは反対側の扉から外に出ようとしたところ、「先輩！」という声があった。振り返ると、その彼が私を呼び止めてきたのである。

私の体はもう半分以上扉から外に出ており、そのままどこかに行ってしまうおもう思っていた。彼は私に声をかけてきたのと同様、「先輩、そこは『ミ・ラ』ではなくて『ミ・ソ』ですよ」と音程関係の間違いを指摘してくれたのである。私は一瞬そんなはずはないと思いつつも、改めて彼の意見を考えると、確かに彼の言い分が正しいことがわかった。だが私は、『ミ・ラ』の音程関係を押し通すことにし、それをするために音楽理論そのものを書き換えてしまえばいいと思った。端的には、自分だけの音楽理論を作ろうと思ったのである。そう決意したところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/12/21(土)05:27

【追記】

改めて上記の夢の最後の場面を振り返ると、世間一般で正しいと思いつまれていることを正しいとせず、何か自分なりのモノの見方や枠組みを自らの手で作り上げようとする自分の意思のようなものを見る。また、上記の夢は、理論も技術も自分独自のものを創造していこうとする今の自分の姿を映しているように思えた。

5373. 取れてきた感覚: 気を伝達する曲作りに向けて

時刻は午後の4時を迎えた。つい先ほど、気分転換がてら外の空気を吸いに、街の中心部のオーガニックスーパーに行ってきた。もう街はクリスマスモードであり、今日は土曜日ということもあつてか、スーパーまでの道には普段ないような出店が出ていた。道端では、クリスマスソングを歌う人たちの姿も見かけ、通りを行き交う人々の表情は幸せそうであった。

スーパーに到着し、バイオダイナミック農法で作られたゴマのペーストと4種の麦類のフレーク、そして豆乳を購入した。スーパーからの帰り道、後ろからやってきたオランダ人の若い男性に、「你好(ニーハオ)」と声を掛けられた。以前にも、中学生ぐらいの男の子たちに同様に声を掛けられたことがあるのだが、彼らは一様に私を中国人だと思っているようだ。

そういえば、今年の秋に日本に一時帰国する際に利用したJALの機内でも、日本人のCAの方から最初英語で話しかけられた。日本人から英語で話しかけられることはこれまでの8年間の欧米生活でほとんどなかったように記憶している。確かに、今回は機内食でジャイナ教のベジタリアン食を注文しており、事前にCAの方がそれを知って、私のことを日本人ではないと思ったのかもしれない——名前は どう見ても日本人のものだと思うのだが——。今日の出来事や直近一年の体験を踏まえてみると、どこか日本人の雰囲気が取れてきたのであろうか？それは自分ではよくわからない。

「何かが取れてきた」ということと言えば、偶然ながら、今朝方に、「何かをしようという感覚がなくなってきたな」という気づきを得ていた。これまでは、私はどちらかというと探究や実践という名の下に、何かをしようとし続けていたように思う。それがとりわけ今年からは不思議なことに、そうした意識が極度に薄まってきたのである。どこか自分の中で凝りがほぐされたというか、より肩肘張らずに生き始めたというか、とにかくそういう感じなのである。端的に言えば、生きることしかなくなったと言えるかもしれない。

探究、実践、仕事、そしてライフワークというものすらなくなり、生きることのみがあるようなのだ。肯定的な意味で生きがいもなく、生きることそのものが生きがいになっているという状態。そうした感じなのだ。

小鳥たちがピョピョと鳴き声を上げている。早朝のみならず、いつもこの時間になると再度小鳥たちが鳴き声を上げ始める。彼らの生活リズムの中で、この時間帯は何か特殊な意味があるようだ。

午後に作曲実践をしていると、気を伝達するような曲が作れないかと考えていた。ひょっとすると、そうしたことを意識せずとも既にそうしたことが実現されているのかもしれないが、自分の気を曲の中により込めて、曲を通じて気を伝達するようなことができれば面白いと考えていた。その気は治癒的・変容的作用のあるものとし、そうした気を込めた曲を作る方法を模索してみよう。例えば、今聞いているハウアーの曲などにはそうした作用が多分にある。とりわけ、トランスパーソナル領域へ誘う力があることは大変興味深い。ハウアー自身が述べている傑作の“Zwolftenspiel”というピアノ曲を紐解いていこう。その構造的な特性を含め、様々な角度からこの曲をまずは解析していき、自分の気を世界に共有するための曲作りにつなげていきたい。フローニンゲン:2019/12/21(土) 16:19

5374. 「有りや無しや」の自己：前回のゼミナールの同窓会の動画を拝見して

時刻は午後7時半を迎えた。今日も「有りや無しや」の人生の1日があった。

ある瞬間において自覚的に自分は有って、ある瞬間には自分は無かったかのような感覚。明滅する自己のようなものがそこに…、そこに有りや無しやだった。

午後に近所のスーパーに買い物に出かけた帰り道、クリスマスの雰囲気にも包まれた街中を歩いていると、オランダ名物の光景に出くわした。それは基本的には夏の風物詩なのだが、今日もそれに出くわした。

オランダでは船を所有している人が多く、夏の季節になると、船の所有者たちが近場の運河から遠くの運河や海に出かけていく際に、運河を架ける橋が上がる姿をよく見るのである。もちろんこれは夏だけではないが、夏の季節が一番多いことは間違いない。今日は偶然ながら、一艘の船が運河を出発するところであり、通ろうと思っていた橋が上がっていた。

今日は休日ということもあり、そして街がクリスマスモードのためか出店も増えていることもあって、人が多かった。橋の前にも船がゆっくりと通り過ぎていくのを待つ人たちで溢れかえっていた。その中で私は、周りの人々の表情や運河の方をぼんやりと眺めていた。すると、パッと私は消えた。そしてしばらくすると、パッと私は戻ってきた。やはり、自己は「パッ」なのだ。

パッと消えている時間においては、「眼」と呼ばれる「眼」と認識されているらしきものから映る全てのものが、自己を通して立ち現れており、それらがしかるべき形でしかるべきように動いていた。なるほど、世界は「しかるべき」であったか、という気づきがパッと自己に戻ってきた後に降ってきた。そしてどうやら、この世界というのは自己を通じて立ち現れるらしく、自己は世界を通じて立ち現れるらしきことがわかったのである。

運河無くして自己無し。自己無くして運河無し。そうなのだ、それがこの世界の全ての事物に当てはまる。

先ほど夕食を食べている最中、「逢茶喫茶・逢飯喫飯(ほうさきっさ・ほうはんきっばん)」の実践を放棄して、あることをしながら夕食を食べていた。私は普段、「逢茶喫茶・逢飯喫飯」を通じて全ての活動をするように心掛けている。中には意識せずとも行えている活動もあれば、中には意識しないとそれができない活動もある。そもそも「逢茶喫茶・逢飯喫飯」とは、お茶を飲むときはお茶を飲むことに成り切ること、飯を食べるときは飯を食べることに成り切ること、という意味の仏教用語である。夕食は夕食に成り切ること。そして感謝の念を持って、ダイニングの窓の外の闇を見ながら独り静かに夕食を食べているのが常である。

だが今日は、前回のオンラインゼミナールの後に行われた、受講者同士が集まって開催された「同窓会」という名の飲み会の様子が映された動画を見ながら夕食を食べていた。ある方がこの動画を撮影してくださっており、それを昨日私に送ってくださった。動画を通じて、みなさんがとてもリラックスして楽しんでおられる様子が伝わってきて、こちらも嬉しく思った。そして動画を通じて、随分とゼミナールの主催者の私がイジられていることを知って微笑ましく思った。

動画としては30分ほどだったが、お一人お一人のシェアを聞きながら、何とも言えない喜びの感情があった。動画の中で語られていることに耳を傾けていると、色々はこちらからも話したいことが出てきてしまった。今回のゼミナールには、前回のゼミナールにご参加いただいた方々もいらっしゃるので、今から同窓会についてのコメントを音声ファイルとして言葉の形にしておこうかと思う。フローニンゲン:2019/12/21(土)19:48

5375. トランスパーソナル的体験を音化して伝達したヨーゼフ・マティアス・ハウアーに範を求めて

今日は珍しく、午後9時前を迎えるこの時間に日記を綴っている。実はもう一回ほど作曲実践をしようと思ったのだが、音を生み出すよりも言葉を生み出したいという思いが勝ったようだった。それなのに、今から私は音に対して書こうとしている。そんな不思議な状態だ。

いやはや、オーストリアの作曲家ヨーゼフ・マティアス・ハウアーの作曲思想と作曲技術には本当に感銘を受けてばかりである。今日は、“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”を午前中より食い入るように読み進めていた。自分にとって響く箇所に自分なりのコメントを書籍の中に書き込み、掲載されている譜例をもとに、あれこれと試

行錯誤をしながら実験的に短い曲を作っていた。今日の大部分の作曲実践はそのような形で進んでいた。明日もまたそのように作曲実践をしようと思っている。いや、ここからしばらくはハウアーの作曲思想と作曲技術を中心にして、リズムやメロディーに関しては補足的にバッハに範を求めていこうかと考えている。

ハウアーは、ショーンバーグよりも先に12音技法を提唱したと言われているが、私はそうしたことよりも、ハウアーの音楽思想、とりわけトランスパーソナルな領域に価値を置いた考え方に強く共感している。

トランスパーソナルな領域を曲として表現していくこと。いや、それは表現というよりも、聴き手にトランスパーソナルの領域を垣間見せ、曲を通じてトランスパーソナル領域の体験を促すことに重きを置いていたのがハウアーなのだ。しかもそれを理想論で終わらせず、実際にそれを実現させる技術を模索し、それを実現させていった点にハウアーの偉大さがある。

先日読んでいた“Style& Idea: Selected Writing”の中でショーンバーグは、ハウアーの作曲について批判的な見解を表明していたが、今の私にとっては、ショーンバーグよりもハウアーの技術の方が優れているように思える。少なくともハウアーの技術の方が魅力的に感じる。

今日から読み進めている書籍は、引用文献リストを含めて170ページほどと短いのだが、中身は途轍もなく濃い。これは年内から年明けにかけて何度も読み返そうと思う。本書で書かれている理論と譜例を参考にしながら、過去の自分のトランスパーソナル的な体験や今の自分のトランスパーソナル的な考えや感覚に合致するような音をまず選び出していく。それらを複数個組み合わせる形で、ハーモニーを生み出すための塊を作る。

そこから、その塊をメロディーとして押し広げていく。その押し広げられていく音楽的な時間と空間が聴き手に対してトランスパーソナルな何かを喚起させる、ないしは追体験させるような仕掛けをしていきたい。ハウアーの書籍は、まさにそうした仕掛けを考案する上でうってつけの書籍であり、上記の書籍は今年に購入した中で最良の書籍だと思われる。アメリカのアマゾンにもイギリスのアマゾンにも在庫が置いてなく、ドイツのアマゾンにだけ在庫が置いてあったことは本当に幸運であった。本書は出会おうべくして出会った本なのだと思う。

本書を起点にして、今後はハウアーの作曲に関するドイツ語の書籍を読み進めてもいいかもしれない。以前述べたように、ハウアーの作曲技術に関しては英文書籍よりもドイツ語の書籍の方が数が圧倒的に多い。というよりも、英語の書籍で読めるのは上記ぐらいしかない。まずは上記の書籍を何度も繰り返し読み、実践をしばらく積んだ後、自分の関心に合致するドイツ語の書籍を数冊購入することを検討する。

文献調査をしていると、書籍ではなく、“The Zwolf-tonspiel of Josef Matthias Hauer (1992)”という35ページほどの論文を見つけた。早速ダウンロードしてざっと眺めてみたところ、これは腰を据えて読むべき論文だとすぐにわかった。そこからさらに、同じ著者が執筆したハウアーに関する博士論文もダウンロードした。こちらの博士論文はボリュームがあり、300ページ弱ほどある。まずは、上記の短い論文の方を近所のコピー屋で印刷しようと思う。

これは自分にとって、PDFで読んでは決してならない論文であり、とにかく紙で読み進めていきたいと思う。マルタ旅行に出かける前にダウンロードし、マルタとミラノの旅の際に持参することも検討に入れる。とにかくこれからは、ハウアーの作曲思想と作曲技術の理解習得に向けて学習と実践を進めていこう。フローニンゲン:2019/12/21(土)21:10

5376. 泥中を道として生きて

時刻は午前4時を迎えようとしている。今朝の起床は午前3時過ぎ(3:13)であり、昨日とほぼ同じ時間の目覚めである。確か昨日の起床は、もう10分ほど遅かったように思える。

相変わらずの全き静寂。この世界の静けさを味わうともなしに味わう自己。その瞬間に静寂さは自己となり、自己は静寂さになる。静寂さを感じようとすることやそれを味わおうとするのはおかしいことだったのだ。その一つのおかしさは、そうした意識が働く瞬間に我が立ち、真の意味で静寂さを感じることや味わうことを妨げてしまうことである。もう一つは、そうした意識が働く瞬間に、静寂さは感じられる対象や味わわれる対象と成り果ててしまうということだ。

本来、静寂は対象物になり得ないのだ。それが真の静寂であれば、それは即私となるはずなのだ。そうした点において、静寂さが自己と化し、自己が静寂さに化すという直感的認識は、今の自分にとって大変腑に落ちる。

起床してオイルプリングをしながらヨガを行い、先ほど小麦若葉のドリンクを作った。その際に、前回のゼミナールに参加して下さっていたある方から、ゼミナール後の同窓会(飲み会)の際に撮影した動画を昨日送っていただいた。

昨日の夕食時に、「逢茶喫茶・逢飯喫飯(ほうさきっさ・ほうはんきっぱん)」の実践を放棄して、夕食を食べながらその動画を見ていた。その中で、私が尊敬をしている友人のシェアがとても面白かった。その友人とはおよそ毎年一回ほどオンラインを通じて話をさせてもらっている。飲み会の場では、1人1人が「自分にとってインテグラル理論とは何か？」について発表をしていた。

その友人の発表の冒頭に、私に関する話があった。その中で、「加藤さんのブログを見ていると、言っちゃあなんですけど…、正直イっちゃってるじゃないですか。彼は特殊な純粋培養の世界において、自分の代わりにああした探究をしてくれているように思うんです」というような発言があった。それを聞いて、思わず笑ってしまったが、その後色々と考えており、今朝も起床時にそれについて考えていた。

少なくとも、この欧米での8年間の生活の中で、純粋培養の世界にいたとは私は認識していない。むしろ、一度たりともそのような環境にはいなかったように思うし、今もない。

人間の真の成熟は、果たして純粋培養の世界から起こるのだろうか？私は否だと思う。過去8年間の振り返ってみたときに、目には見えないほどにゆっくり、かつ小さなものではあったが、私は成熟を遂げてきたように思う。そうであれば、自分はやはり純粋培養の世界になどいなかったのであり、むしろ泥中にいたのだ。

「蓮は泥中より咲く」という言葉が思い浮かぶ。やはり私はこの8年間、泥の中に揉まれて日々を生きてきたのだという確かな実感がある。一方で、現在のように、自分の内的時間に従って生きることや、日々充実感と幸福感を感じながら生きることが純粋培養の世界の中で生きていることだと捉えられてしまうこの現代社会の風潮はどこかおかしくないだろうか。自分の固有の生命時間を生きることや、日々の瞬間瞬間に絶対的な喜びを見出して生きることが、純粋培養の世界の中でしか生じない現象であるという認識の枠組みは、早急に打ち壊されるべき類のものなのではないだろうか。

友人のシェアの中で興味深かったのは、「イッている」という言葉である。それをどのように文字変換するのか、つまりどのような漢字を当てるのかによって随分と意味合いが異なってくるため、色々と考えさせられることがあった。

ここ最近の日記で書き留めているように、確かに今の私は、「逝く」道を歩いているように思う。向上道と向下道のうち、私は再び前者の道を歩き始めたように思う。

「逝く」というのは「逝去(せいきょ)」という言葉にも現れているように、死ぬという意味がある。一昨日あたりの日記で書き留めたように、今の私は、我を徹底的に放伐する道を歩き始めた。それは我が死に向かっていく道であり、同時に上り道でもある。この道を上りきらなければ、下りの道はない。この道を歩くことは自分にとって難題である。この先も紆余曲折があり、まだまだ上り道があることは承知だが、今回の上り道を上り切れれば、また新たな形で下り道を歩めるような気がしている。下り道を歩く具体的な形も少しずつ見えてきている。

そのためには、まずは「無我の我」が恒常的なものになる必要がある。今日という1日もそこに向かう過程であり、今日そのものが道となる。いや、それはもう最初から道としてそこにあり続けているのであって、自分に求められているのは、道を作ることでは決してなく、道として生きていくことだけなのだと思う。フローニンゲン:2019/12/22(日)04:35

5377. ヨーゼフ・マティアス・ハウアーに関する3つの論文と今朝方の夢

つい先ほどまで日記を綴っていると、時計の針が少しばかり進み、時刻は午前4時半を迎えた。ふと我に返った時に時間が経っていることに気付いたり、1日が終わりに近づいていることを感じる日々である。なるほど、そうであれば、今の私が向かっている「私の放伐」の道を歩き切れれば、我に返る我がもはや「無我の我」の我であるから、時間感覚もまた変容するのではないかと思われる。今はまだ、無我に至る前の我として生きており、ここから無我に至り、再度我に戻ってくる。それが無我の我である。

一昨日に届いたヨーゼフ・マティアス・ハウアーの作曲思想と作曲技術に関する書籍について、昨日の日記でも言及したように思う。この書籍が今の自分にとってはあまりに秀逸であり、昨日は随分と歓喜の中にいたように思う。本日はその続きを読み進めていく。この書籍は何度も繰り返し読んで

いこうと考えているが、そうした繰り返しの読書と並行して、ハウアーに関する3つの論文を見つけたので、それらも合わせて読んでいこうと思う。具体的には、下記の3つの論文である。

1. “The music and theories of Josef Matthias Hauer (1990)”
2. “Concerning the spiritual in music: The twelve-tone aesthetics of Josef Matthias Hauer (1991)”
3. ”The Zwolftonspiel of Josef Matthias Hauer (1992)”

全て同じ研究者による論文であり、一番上のものは博士論文だ。昨日の段階では、一番下の論文だけPDFではなく、印刷をして読み込んでいこうと思っていたが、真ん中の論文も大変興味深かったので、それも合わせて印刷しようと思う。

ハウアーはシュタイナーの思想やゲーテの思想を参照していたことで知られており、実際に真ん中の論文でもシュタイナーの文献がいくつか引用されていた。再来週からはマルタ共和国に行くため、印刷は来週中にしておこう。そのために、近所のコピー屋に近々足を運ぼう。少し前にビザの資料を印刷する必要があったため、その店に足を運んだところ、店主のダニーがインフルエンザか何かにかかっていてコピーができなかった。ダニーの無事を確認する意味も含めて、来週の始めに彼の店に行こう。

昨日は、ハウアーの傑作の一つである“Zwolftonspiel”をひたすら繰り返し聴いていた。そこにはハウアーの思想が滲み出ており、トランスパーソナルな領域での体験を聴き手にもたらしという考えが具現化されているように思えた。上記の3番目の論文は、まさにこの曲を取り上げており、作曲において非常に参考になる考察がなされているため、早く読みたい気分である。

今はまだ曲を作っているというよりも、曲を生み出すための実験をし続けているという感覚であり、今日もこれからそうした実験をしていく。その前に今朝方の夢を簡単に振り返っておこう。夢の中で私は、日本の近未来的な街にいた。そこは人混みは少なく、清潔感があった。私はこれから電車に乗って、空港駅に行く予定だった。

駅に到着し、目的の電車が到着するプラットフォームを探した。その駅を訪れたのは初めてだったため、少し迷ったが、なんとか無事にプラットフォームに到着した。すると、10:49発の電車がちょうど

到着しようとしていて、私は運がいいと思った。その電車に乗ると、そこには友人の誰かがいて、彼と少しばかり雑談をしていた。そこからフッと夢の場面が変わり、私は学校の教室にいた。

教室内では何か授業が行われていたが、生徒は皆成人だった。私は右列の前から3番目に座っていた。私の前、つまり前から2番目の席には、私と歳が近いある有名なYoutuberの方がいた。彼は読書家であり、知識を豊富に持っている。そんな彼が、教壇上の先生の発言に対して、自分の意見を述べ始めた。

場の雰囲気を見ると、その場にあまり相応しくないような発言を彼がしていて、教室の中は少し嫌な空気になった。彼は決して悪気があったわけではなく、彼の感覚からしたら当然のことを当然のように話していただけなのだが、周りから見ると、それは持っている知識や知性をひけらかすように映っているようだった。そこで私はスッと立ち上がり、彼の左肩を軽く叩き、「ちょっと外で話でもしようか」と持ちかけた。私の方を振り向いた彼は何事かという表情を浮かべていたが、私についてくる形で一緒に廊下に出た。

先生や他の生徒たちは、彼を教室の外に追いやった私に感謝の念を伝えているのを感じた。廊下に出た後、私は彼にあの場ではああした形で話をするのは望ましくないということを伝えた。すると彼は、ビックリ仰天した表情を浮かべ、彼の考え方と先生や生徒たちの考え方が全く異なることに気づいたようだった。自分の常識が世間の非常識であること、自分の非常識が世間の常識であることはよくあることだ、ということを彼に伝え、私たちは一緒に何か飲み物を買いに外に出かけた。フ
ローニンゲン:2019/12/22(日)05:05

5378. 本日のゼミナールを振り返って: 仮眠中のビジョン

時刻は午後2時半を過ぎた。つい先ほど仮眠から目覚め、これから夕方に向けての取り組みに従事したい。

今日の正午から午後1時半まで、オンラインゼミナールの日曜日クラスがあった。金曜日クラスに引き続き、本日のクラスでも大変興味深い論点が場に共有された。一方で、個人的に反省すべき事柄があり、それについてはまた自分なりの改善策ないしは打ち手を考えたい。こうしたオンラインゼ

ミナールをこれまで7年間ほど不定期に行ってきたが、学びの場を作るということについてはまだまだ学ぶ必要があり、実践を積み重ねていく必要があると自覚する。この点については、遅ればせまながら、毎回のクラスをより有意義なものにするための準備と工夫を心掛けていく必要がある。年内最後のクラスが来週にまたあるので、今日よりも充実した学びの場が自ずから醸成されるような心掛けと実践をしてみたい。

先ほど仮眠を取っている最中に、印象に残るビジョンを見ていた。私は、欧州のどこかの国を走るバスの中にいた。バスには乗客はほとんどおらず、おそらくオランダ人と思われる白人の中年男性が運転手をしていた。その運転手は帽子をかぶっており、少しばかり小太りであった。

私はバスの左列の真ん中あたりに座っていた。ちょうど私の前の座席には、小中学校時代の男女の友人が3人ほど—2人の女性(MF & KY)、1人の男性(KS)—座っていた。彼らは私が後ろに座っていることには気づいていないようであり、3人で何かの話題について楽しげに話をしていました。

私は窓の外をぼんやりと眺めながら、彼らの話に耳を傾けていた。あるところでふと、3人は突然ZARDの歌を口ずさみ始めた。その歌は、私たちが小学生だった頃に流行っていた懐かしいものだった。バスの中にいたからか、彼らは少し遠慮がちに歌を口ずさんでいたが、3人の表情はとても明るかった。彼らの歌に耳を傾けていると、私も思わずサビの部分から口ずさみ始めた。バスの運転手は、ミラーを通じて私たちの方をチラリと見て、微笑んだ。そのようなビジョンがあったのを覚えている。

仮眠から覚めてベッドの上にいる自分に気づいた時、不思議な感覚があった。ここでもやはりまた、あの頃から今にかけての自分の不変的な存在感覚が現れたのである。あの頃から今にかけて、私は多少なりとも変わった。だが、もはやどうにもすることのできない変わらないものが確かに自分の内側にあって、それがとても尊いもののように思えたのである。目が覚めてからも少しの間、私は仮眠中のビジョンの中で口ずさんでいた歌を歌っていた。

今朝方の夢について振り返っている時、そして今仮眠中のビジョンを振り返ってみてふと、いつか夢やビジョンについて書かれた日記だけを集めて編集してみると、何か面白い発見が得られるかもしれないと思った。そうした振り返りを行うに資するだけの材料はありそうなので、あとはそれらをまと

めていくことを行うだけだ。一連の夢やビジョンを辿ることによって、自分の無意識の世界の変化や変遷を探ることができるかもしれない。そのような思いつきの案があった。フローニンゲン:2019/12/22(日)15:05

5379. 暖冬の日々:今朝方の夢

今日からまた新たな週が始まった。月曜日の朝は、昨日までの休日の朝と同様に静かである。

今朝は少しゆっくりと、午前4時過ぎに起床した。質の高い睡眠を十分に取れたという感覚と共に目覚めることができ、1日のスタートを最良の形で切れている。

時刻は午前5時に向かってゆっくりと進んでいる。ここ最近思うのだが、今年の冬は例年に比べて随分と暖かい。確かに、雨が降る日が多く、1日のどこかで大抵必ず雨が降っているような天気なのだが、そのおかげか、気温は思ったほど低くないのである。毎年、年内には必ず何度か雪が降っていたように思うが、今年はまだ目立った雪は降っていない。霜が降りた程度である。とはいえ、こうした年に限って、実際に本格的な冬がやってきたら大雪が降るものである。

今年は雨が例年より多いというのは、逆に言うと、ここからさらに気温が低くなってくれば、それらは雪に変わり、雪が降る日が多くなるということを予感させる。おそらく、ミラノから帰ってくる1月の第2週の終わりには、もう随分と気温が下がっており、その頃には雪が降る日が多くなっているかもしれない。そうした覚悟をしておこう。

早いもので、いよいよ年末年始の旅行の日がおおよそ1週間後に迫ってきた。日々自分の創造活動に打ち込み、協働プロジェクトなどに従事していると、あっという間に時間が過ぎ去っていき、あれよあれよというまに12月もここまで来た。ちょうど先週の金曜日からは、オンラインゼミナールも始まり、それによってさらに時の流れが早く感じられる。

今週末の日曜日のクラスを終え、月曜日に準備をして、火曜日にマルタ共和国に向けて出発する。マルタ共和国は、冬でも随分と暖かい気候らしく、オランダの気候とのギャップを楽しみたいと思う。

今朝方は珍しく、印象に残る夢を見ていなかったように思う。ただし意識的に思い出そうとしてみると、私は小中学校時代の親友(HS)と駅の構内で話をしていたのを覚えている。私たちは、欧州のどこかの国の駅の構内にいて、これからどこか別の街に出かけていこうとしていた。

駅に到着すると、目的地に向かう特急列車があと少しでやって来るようになっていたが、私たちは別の友人(HO)の到着を待つ必要があった。彼は特急列車がやってくるギリギリになって駅に姿を現し、その時私は、今からやって来る列車ではなく、もう1本後の列車に乗る必要があるだろうと思った。それを私は2人に伝え、駅の改札口を焦らずに通った。次の列車に乗れば良いということで、時間があつたため、私は飲み物でも買おうと思った。だが、自分が飲みたいと思うものが駅構内で売られておらず、私たちは速やかにプラットフォームに向かった。

すると突然夢の場面が変わり、一つ前の場面でも登場していた親友(HS)がトイレ掃除をしているところに遭遇した。彼はぶつくさと不満の言葉を述べながらも、トイレを磨いていた。本来それは私がやるべきことのように思えたが、今回は彼が代わりに掃除をしてくれているようだった。そのような夢を今朝方見ている。その他にも、顔と名前は定かではないが、比較的年齢の近い日本人の女優と話をしている場面もあったことを覚えている。

夢から目覚め、親友がトイレを掃除している光景がまだ残っていたため、それに影響されて、先ほどトイレを綺麗にした。そのおかげか、今の私の気分は爽快である。年末年始の旅行の前には各部屋の大掃除を行い、綺麗さっぱりと旅行に出かけ、2020年は綺麗な部屋に戻ってくることからスタートさせたいと思う。フローニンゲン:2019/12/23(月)05:09

5380. 受託と委託

心を落ち着けて、自分の取り組みに集中していく。それを今日も心掛けていく。来週からはマルタ共和国に行くため、先日の日記で書き留めておいたように、今週のどこかで論文を印刷しておこうと思う。ヨーゼフ・マティアス・ハウアーに関する2つの論文を、近所のコピー屋で印刷するのはいつが良いだろうか。クリスマス休暇があるかもしれず、その点には注意が必要だ。PDFの論文を添付した印刷依頼メールを送信する際に、店主のダニーに休暇の有無を尋ねておこう。

昨日は、ハウアーの作曲思想と作曲技術に関する書籍“Serial Composition and Tonality: An Introduction to the Music of Hauer and Steinbauer (2011)”の初読を終えた。書籍が届いてからわずか1日で本書を読んでしまったのも、ハウアーに対する関心の高さだろう。ハウアーの作曲思想や作曲技術はもちろんのこと、彼の神秘主義的なものの見方や生き方に関心が強くあることが、集中的な読書をもたらした。そうした読書をこれから印刷する2つの論文に対しても行っていく。

今日の作曲実践においても、昨日に引き続き、ハウアーが考案した作曲技術を実験的に適用していく。今はとにかく試行錯誤を伴った実験に次ぐ実験を行う時である。理想と現状には大きな隔たりがあるが、それは一切気にする必要はない。現状と大きな隔たりがあるほどの理想を持っているということは幸運なことであり、そうした理想を大切にしていこう。あとは、時の進行と着実な実践がそこに連れて行ってくれるのを待てばいいだけである。時と絶え間ない実践が、いつか必ずそこに連れて行ってくれる。それはもう、過去の経験則から覆しようのない事実である。そして何より、それは発達の原理でもあるのだ。

先日友人が述べていた言葉を思い出す。彼からしてみれば、私は彼の代わりに、ある領域における探究や実践をしているとのことであった。それは正しいように思えるし、おそらく人は誰もそのような形で生きているのではないかと思った。端的に言えば、私たちの誰もが、誰かの代わりに己の仕事に従事しているのだ。言い方を変えると、人にはそれぞれ使命ないしは天明のようなものが賦与されており、誰もが誰かのために自分の役割を担っているのだ。そこに私たちの受託と委託の関係を見る。

私たちは人生そのものから使命や天命を受託し、他者に対してはそれ以外のことを委託しているのだ。こうした受託と委託の織り成す関係性の中で私たちは日々を生きているのだろう。仮に言葉や音を生み出すことが自分の役割ならば、それを生み出すための最善の心掛けや実践を惜しまない。自分の状態をできる限りの方法で整え、役割を全うするための最良の環境を選び、そこに身を置く。自分が身を置く環境と、自分自身の状態が、どれほど自分の言葉と音に影響を与えるかはもう明白である。そうしたことから、ここからはより意識的に、自分の役割を十全に担うための環境選択と自分の状態を整えることを行っていく。そのようなことを考えていた。フローニンゲン:2019/12/23(月)05:32